

## 明清時代北京の花卉文化

その他のタイトル	The Flower Loving Culture in Peking in Ming and Qing Dynasties
著者	一ノ瀬 雄一
雑誌名	史泉
巻	81
ページ	38-51
発行年	1995-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00025382">http://hdl.handle.net/10112/00025382</a>

# 明清時代北京の花卉文化

一ノ瀬 雄一

## 一、はじめに

中国史上における明清時代は、それまでの伝統社会が一つの成熟段階に達した時期といわれる。この時代の人びとは、花や木などの自然とどのように関わり、愛玩用の花とどのように親しんできたのだろうか。

歴史上の花の文化に関しては、塚本洋太郎氏<sup>①</sup>や中尾佐助氏の研究がある。両氏の著作は、中国だけに限らず世界各地の花の文化を扱ったもので、人と花との関わりを、花および地域ごとにそれぞれ論じている。とりわけ中尾氏は、中国文化に見える花卉について、

隋、唐の頃には、中国の花卉園芸は一つのピークに登ってきた。……第二回目のピークは宋代、とくに南宋の時代と私はみている。……中国ではそのあと元、明と王朝が交代するが、明代には花卉園芸文化は高い程度に保たれたものの、だんだん創造的な力は失われたようにみえ

る。唐代から明代にいたる間こそが、中国の花卉文化の長くつづいた盛行期であって……<sup>②</sup>

と述べている。中国の花卉園芸文化は、宋代のピークのあと明代には創造力が失われ、清代を衰退期ととらえているが、この観点は育種栽培の進展に重きを置いたものである。

これに対して、社会風俗としての花の文化について論じた合山究氏は、

明清時代に花の文化が未曾有の活況を呈した……明清時代には、社会生活において、さまざまな花の文化があらわれ、隆盛をきわめたのである……<sup>④</sup>

と述べ、明清時代は花の文化の隆盛期であると論じたが、個々の具体相については未解明の点もあると思われる。

そこで本稿は、明清時代の北京を中心に花と人との関係について論じ、花卉園芸文化がどのように形成されたかを考究したい。

## 二、北京と花卉

## (一)花の名所

中国人の生活にとって、花は欠かせないものであった。その端的な例は、明末清初期に中国を訪れたイエズス会士アルヴァーロ・セメードの次の記述に見られる。

花はこの国民の間ではことのほかに愛好されている。

なかでも特別に美しい花があつて、それは、われわれのところにはないものである。他方われわれのところにある花はここにはなんでもあるけれども、カーネーション類はべつであつて、彼らが知っているのはただひなびた、香気のないものだけである。彼らは庭に一年中花をたやさないように努めており、このことについては大麥こり性である。花のうちには普通自然の法則をこえてさきつづけ、花にはつきものの短かい生命という特性からはずれてゐるものもある。<sup>⑤</sup>

ここから、花卉を愛する中国人の民族性、中国におけるその品種の豊富さ、冬に人工的に咲きつづける花についても知ることが出来る。

北京に限つても、人びとは花を愛し、城内および郊外には、花の名所とよぶべき寺観や園亭などが存在した。明代の例として『万曆野獲編』巻二十四、京師園亭の条には、

都の園亭では、……城外では則ち李寧遠の圃が最も広々

としてゐる。……張惠安の園はもっぱら芍薬に富み、数万本に至る。……また万瞻明都尉の園は、前にすすむと小さいながれをわたり、芍薬がまた繁つてゐる。……また米仲詔進士の園は、ことごとくに江南の庭園をまねてゐる。

とあり、明末の状況を知ることができる。

また清末に例をとれば、『同光間燕都掌故輯略』第三、慈仁寺の条に、

都の花見については、憫忠寺の丁香、崇效寺の牡丹、極楽寺の海棠、天寧寺の芍薬、豊台の芍薬、十刹海の荷花のみ（をあげることができる）。慈仁・長椿の二寺にも花が多いが、一種類（の花）で有名となつてゐるわけではない。

とある。これら以外にも花の名所は幾つかあつた。例えば『天咫偶聞』巻九には、

城外西郊の花見については、近来、馮園をもつて盛んとしてゐる。園は広寧門外の小さな丘にあり、春の牡丹や芍薬、秋の菊を最上としてゐる。城中の士夫は、くつわを連ね車を接し、往く者はむらがり集まる。園の主人は、思うに花に隠れる者である。

とあり、清末の頃、いろいろな花の見ごろにあわせて、馮園には人びとが散策に訪れてゐた。

北京の人びとの花好きな例は、今世紀初頭に北京を訪れた船津輸助の『燕京佳信』第十一信（明治三十五年「光緒二十八年、一九〇二年」、十月二十八日付）にも次のように見える。

偶、北清第一の花園を有せる白雲觀に至れるに、ササガ奇石を積上げたるに蔦の少しは色づける（ココノハ少シク趣アリ）。亭の其上に立てる、次の庭に菊の盆栽（中々種々この色あれど花小さし。トテモ日本ニハヨバズ）を並べたる、浄潔を極めたる、好処ながらロシヤの露清銀行の支配人が寓所となりをるも口惜しや。<sup>⑥</sup>

とあり、清末にロシヤの所有地となった白雲觀（北京城の西郊一里ほど）での様子を述べているが、それ以前には多くの人士が花卉の鑑賞のために足を運んだことであつたろう。

## （二）花の鑑賞法と用途

中尾氏は、中国の花卉文化が一般庶民にまで普及しにくかつたとし、その理由を、次のように庭のかたちに求めている。

中国では……唐代頃から、花卉、花木の栽培、鑑賞は爆発的に発展したという歴史がある。それは権勢の者、資産家が、四合院住居をいくつも組みあわせて複雑な平面となる住居をつくり、院子の数をふやし、あるいは院子を思いきって拡大し、そこに花卉、花木を栽培したり、また住居に接して塀でかこまれた、栽培を主とする専門

的な園をつくったりしたからである。つまり「園」とは、当初から花卉、花木のほか、蔬菜、果樹の栽培がその中行なわれた所なのである。しかしこうした園まである住居をもちうるのは、いうまでもなく上流階級だけのことで、したがって花と庭木は上流階級の独占物となり、庶民には普及しがたいことになった。<sup>⑦</sup>

たしかに庭園をもつことができたのは上流階級だけであり、庭木の所有も同様であろう。しかし庭がなくても、植木鉢を使うことによって花を身近に置いて楽しむことはできるのであり、それゆえに花卉文化が広く普及することも可能となった。都市という限られた空間の中で、人びとが花を鑑賞するには、鉢植えという方法が必要不可欠となった。

『燕京佳信』第七信（明治三十五年「光緒二十八年、一九〇二年」、十月一日付）には、清末の北京において見られる鉢植えを、次のごとく紹介している。

菓物のはちうへにはイチジク、柘榴の鉢植最多く、花物の鉢植は架枝桃（葉ハ柳ノ如ク花ハバラニ似タリ。今サキ居ル）、木槿、桂花（日本のモクセイ也）なり。草花にて最も多きはエゾギク（白キハ菊花ト称シ紫紅ハ江西腊トイフ）とハゲイトウにて此は北清何処にもあり。之に次ぐをヒマワリとす。子ナシ、ヨシロイ、ホーセン花、ランバコもポツポツ見受け候。此外、鉢植にしたるシヤ

ボ天、胡椒（唐辛子のフトク大ナルモノ）を見候<sup>⑧</sup>。

これをもて、さまざま品種の花木が鉢植えとして北京の人々に親しまれていくことがわかる。このように商品として売買される花木は、もちろん鑑賞用であるが、それ以外にも別の用途があった。

道光八年（一八二八年）、北京に赴いた朝鮮使節の一人が記した『赴燕日記』主見諸事の条に、北京で見られる花卉について、以下のごとく述べられている。

花卉は、およそすべてがみな家々に備わっている。多く見られる花は石榴で、葉が重なり、赤い花びらのものが、最も女性の簪によろしい。市中に売るところでは、あるいは玉簪花をもって最上としている。そして最も盛んな花がこれである<sup>⑨</sup>。

とあり、石榴や玉簪の花は髪飾り用のかんざしとして使われた。そして玉簪の花は、

家々の鉢植えで、花を摘んで贈るのは大抵この花である。香氣は蓬勃として、ほかの花の比ではない<sup>⑩</sup>。と、贈答用の鉢植えとして重宝された。また、

かぎたばこの材料はもっぱら玉簪の香りをかりており、城中でかぎたばこを売っていると、花を摘んでかぎたばこの缸の中に納れるのを、そのたびごとに見た<sup>⑪</sup>。

という記述から、かぎたばこに芳香をつけるのにも使用され

たことがわかる。さらに、

その他の花々では、牡丹は薬となる。辛夷・躑躅・杜鵑・鳳仙・鶏冠・諸菊・諸梅など、あらゆるところが無い。鶏冠花もまた染色用となる<sup>⑫</sup>。

とあり、薬用となる牡丹、染料となる鶏冠のほかに、さまざまな花が市中にあふれていた状況を述べている。そして、芙蓉はいたるところにある。紅、白、ピンクの諸色があり、愛らしい。蓮の花の盛んなること、北京に及ぶものはない<sup>⑬</sup>。

と、芙蓉および蓮花の盛んさについて触れている。さらに、棕櫚の樹には鉢植えとされるものがある。根の大きいこと、芭蕉のごとくである。……これを織って敷物をつくる。また箒をつくるにも便利である<sup>⑭</sup>。

とあって、棕櫚樹が鉢植えという用途以外にも、敷物や箒をつくるのに用いられたことがわかる。その上、

仙人掌の鉢植えもある。美しい青色をしており、緑の枝葉は一つの大きな掌のようである。……無花果の鉢植えもある。実を結ぶこと、からたちのごとくである。……熟して赤くなれば、味は甘く、食べることができる<sup>⑮</sup>。

という記述より、鉢植えとなる仙人掌、鉢植え以外に食用にもなる無花果の存在も知ることができる。

(三) 四季と花

北京の宮廷生活は、季節の移ろいの中で、さまざまな花に彩られていた。清代・康熙年間の『金鰲退食筆記』、南花園の条には、

南花園は西苑門の南東にあり、明の時には灰池といった。・本朝では改めて南花園としており、花樹を雑植している。江寧・蘇州・杭州の織造が進めるところの盆景は、みな水を注ぎ、培い植えられている。

とあり、皇城内の南花園（所在区域は皇城西。『光緒順天府志』による。以下も同じ）における花卉栽培について触れている。ちなみに、織造とは絹織物を生産する政府機関であるが、その責任者たる織造監督が、江南地方から鉢植えの花卉を皇帝にもたらししていたのである。南花園で栽培される花は毎月異なっていた。すなわち、

毎年正月には、梅花、山茶、探春、貼梗海棠、水仙花を進める。

二月には瑞香、玉蘭、碧桃、鸞枝を進める。

三月には繡毬花、杜鵑、木筆、木瓜、海棠、丁香、梨花、挿瓶牡丹を進める。

四月には梔子花、石榴花、薔薇、挿瓶芍薬を進める。

五月には菖蒲、艾葉、茉莉、黃楊樹の盆景を進める。

六、七月には茉莉、建蘭、および鳳仙花の五色のまだらが

美しいものを進め、ガラスの盤の中に置く。

八月には巖桂を進める。

九月には各種の菊花を進める。

十月には小さな盆景の松、竹、冬青、虎鬚草、金絲荷葉、および橘樹、金橙を進める。

十一月・十二月には早梅、探春、迎春、臘弁梅を進める。また香片梅、古幹槎牙も有る。紅白一色の花を開くものを、懋勤殿に置いておく。

とある。北京では四季を通じて、さまざまな種類の花が見られ、とりわけ宮廷生活と花との密接な関係がうかがわれる。

例えば乾隆帝の寢室について、イエズス会士ブノワは次のように報告している。

寢台置き所の下部と部屋の残りの部分にはあらゆる種類の自然の花をさした容器が飾ってあります。なぜならば当地では冬の間中、最厳寒の頃にあつてさえも、フランスにおけるよりもずっと安価にあらゆる種類の草花や樹花を咲かせる秘訣をひとびとがもっているからです。わたしは桃の樹や柘榴の樹が一月に八重の花を咲かせるのを見ました。そしてこの八重の花はそのあとで大変大きな桃と石榴の実をもたらしたのでです。もしわたしがひとの贈ってくれたこれらの樹の変化を自分の眼でなんども見なかったならば、これらの果物があの八重の花から生

まれたとは信じることはむずかしかったでしょう。

このように、皇帝を中心とする宮廷生活は絶えず花に彩られていたが、そのみならず、北京の人びとの生活も一年中花に囲まれて営まれていた。『燕京歳時記』正月、東西廟の条には、

西廟は護国寺といい、皇城の西北、定府大街の正西にある。東廟は隆福寺といい、東四牌樓の西、馬市の正北にある。……両廟の花屋はもつとも雅かな観物で、……

とあって、護国寺（内城中城）と隆福寺（内城東城）とに市が立つとき、各市には必ず花屋が設けられていた。つづいて春日には果実の樹木が勝れ、夏日には茉莉（ジャスミン）の花が勝れ、秋日には木犀と菊花とが勝れ、冬日には水仙が勝れている。春花の中では牡丹、海棠、丁香、碧桃のごとき種類がある。みな、厳冬において開花し、つねならぬ鮮かさでしかも艶かである。まことに巧みに自然の工みさを奪い、時節の前払いをなさしめたものである。

とあり、四季それぞれに花木が出回るが、花に乏しい厳冬期でさえ、牡丹・丁香・碧桃などが店頭に並んでいたのであった。

次に四月、玫瑰花・芍薬花の条には、

玫瑰はその色は紫の光沢をおび、甘い香りは「人々の嗜好」にかなう。だから婦女子ははなはだ愛するのである。

四月、花開くるとき花売りは街路に沿って呼び売りをする。その声は悠揚として、もし早朝に起きてこれを聴けば最も味わい深い。芍薬はすなわち豊台が産地である。「そこでは」一望涯なく栽培している。四月、花がまだほんの小さい蕾のとき枝を折って売り出し、城内の坊巷をあまねく売りあるく。

とあって、玫瑰と芍薬の花売りが、街を売り歩くようになる。六月、中頂の条には、

中頂の碧霞元君廟は右安門外十華里、草橋のほとりにある。毎年の六月の朔日に縁日があり、市の中では花卉樹木がはなはだ多く、あたかも錦をならべたように燦いている。外城の土女が多く往って観るのである。

とある。六月一日には草橋で縁日があり、なかでも花市に見るべきものが多いという。

九月の重陽の頃ともなれば、

九花とは菊の花のことである。重陽にいたるごとに富貴の家では、菊花数百鉢をば広大な家屋の前や後の軒端に棚を架えて陳列する。これを望むと山のごときものをば九花山子といい、また四面から積み上げるものをば九花塔という。

とあって、菊花数百鉢による菊の棚が、富貴の家を中心に多く見られたという。

しかし、何といっても北京の花卉栽培で特徴的なのは、唐花すなわち温熱栽培の花であった。明の『五雜俎』巻十には今、朝廷に献上されるものでは、常に季節外れの花がある。そして、みな(花を)穴蔵の中におさめ、四周から火を近づける。故に嚴冬時でもすなわち牡丹の花がある。

とあり、皇帝に献上するために、温熱を利用して栽培された牡丹がつくられたという。そのつくり方については、清の王士禎の『居易録』巻十五に



都で冬季に花をそだてる者は、多くは牡丹、芍薬、紅白梅、碧桃、探春の諸花を廟市に売っている。その方法は、花樹を温室である穴蔵に置き、火を近づける。

とあり、さまざまな花が温熱栽培の対象となることを、まず述べている。そして、

これ(花)を密室に置き、池を掘って穴をつくり、竹をその下に編んで、注ぐに牛の小便を以てし、培うに硫黄を以てする。竈で沸いたお湯を引き、あおぐに微風を以てする。春のような温かさがあふれる中で、一晚を経ると花が開く。(屋外の)多くの花ではもちろん、いまだつぼみもできていないのである。

とある。これによれば、密室内に地面を掘り下げ、牛の小便を注ぎ、硫黄を土中に入れ、熱湯を引いて室温を暖かくするという、きわめて人工的な環境の中で花が栽培された。

このような唐花も、季節の花と同様に、鉢植え仕立てで育てられた。それは、『燕京佳信』第二十四信(明治三十六年「光緒二十九年、一九〇三年」、一月二十一日付)にも見える。

近ごろの植木屋は皆室仕立なり。梅桃最も多し。皆総て形に作れるが多し。椿、ボケ、仏手柑あり。刺松のなど様に葉をマゲテ円くまとめたるあり。秋の菊の時より盆栽大によろしく候。

とあるごとくである。また『燕京歳時記』十二月、唐花の条に

そもそも花売りは室咲きの花をば唐花カシフという。毎に新年になれば人々はこれを買ってたがいに贈答する。牡丹は艶麗えんれいを呈し、金柑きんかんは黄色を垂れ、満座まんざが香かほって芳しく、温かい香は鼻をうち、三春さんしゅんの艶治えんぢはことごとく一堂いっどうにあるがごとくである。だからまた、これを堂花どうかともいう。

### 三、北京の花市と花卉栽培

#### (一)花市と花屋

このように、四季を通じての花に対する需要に伴ない、北京には花を販売するための市や専門店が設けられた。縁日があふる所には花市が開かれ、街路に面して常設の花屋が設けら



れるようになった。

乾隆四十五年（一七八〇年）到北京を訪れた朴趾源の『熱河日記』口外異聞、朝鮮牡丹の条に、『六街花事』を引いて、京師の槐樹斜街・慈仁寺・藥王廟の花市には、つねにこれ（朝鮮牡丹）がある。

とあるように、槐樹斜街（外城西城）・慈仁寺（外城西城）・藥王廟（外城南城）の三箇所に花市が見られた。

また清末の宣統己酉（二年、一九〇九年）の序がある『新增都門紀略』には

鮮花市は布巷大南頭大門内にある。

と、その所在地（外城中城）が記されている。そして同じ頃の『旧京瑣記』巻九、市肆には、

市中花が見れるところは、城外ではむかしは崇文門外の花市・宣武門外の土地廟に人が集まり、城中ではすなわち東は隆福寺、西は護国寺である。

とあるように、外城では崇文門外の花市（藥王廟の花市）や宣武門外の土地廟（槐樹斜街の花市）、内城では隆福寺や護国寺の縁日で、花が売られていた。また、これらの花市で花を仕入れ、街角で声を上げながら売り歩く女性もいた。その姿は図1のごとくであり、花箱を手をさげ、もっぱら女性の客を相手にしていたという。

そして隆福寺の東には、常設の店舗としての花屋が存在し

た。乾隆三十年（一七六五年）から翌年にかけて、北京を訪れた朝鮮使節の洪大容は、その著『湛軒書』外集巻九（いわゆる『湛軒燕記』、花草舗の条で、次のように述べている。

花草舗は隆福寺の東一里ばかりにある。正月十二日にいて見ると、みな土を掘って部屋を造り、各種の花の鉢植えを納めている。上は明るい窓を通し、下は温かい炕を造っている。その中に入ると、春のおもむきがあふれるようである。時に天気は雪で風は寒く、多くの草は凍えているのに、ただこの半畝の土室だけが別世界をつくっている。紅白の花がこもこも輝いているのも、また一つのすぐれたながめである。

すなわち隆福寺の東の花草舗には、土を掘り下げてつくった温室があり、外は寒空であるのに、中は春のようであると驚きの声を上げている。そしてつづいて、

牡丹・芍薬・水仙・海棠・紅白梅・石榴・月桂の諸種については、ないものがない。思うに、豪富家の玩好に供されるのであろう。そして買う者はまた相つづき、その利益の豊かさを占めることができる。また習俗の贅沢さを見ることができる。

とあり、多品種の花があること、それを買い求める客が店頭に相つづいでいること、花を売って得られる利益が莫大なものであること、そして花が大量に売買されるという風俗習慣

の贅沢さにも驚いている。またつづいて、

西に一室あって、そこはますます広い。数十盆の卉樹緑葉が蔭をつくって、それに向かい合っている。ますますさわやかである。思うに中国のならわしでは最も石榴を重んじ、月桂がこれに次いでいる。春の晩に人家を見るに、花の種類は多く、あるいは四五十盆が階段前の庭にならび置かれていたが、そのうち石榴が三分の一を占めている。

とあって、中国で人気のある花は一番が石榴、二番が月桂であり、ある家の庭では、四五十盆ある鉢植えのうち三分の一が石榴であったと、自分の目で確かめた例を上げているのである。

また、朴趾源も『熱河日記』黄図記略、花草舖の条で、花屋の様子を次のように述べている。

みな草花では繡毬、秋海棠、石竹が最も多く、胆瓶に挿しこまれるのはみな四季の花である。翠觚には一枝の紅蓮を挿している。……時はまさに秋、菊がさかんに開花している。……水仙はまだ開花にまで及んでいない。蘭は萱草のように深翠で、香りは嗅ぐほどのものは無い。

すなわち花屋には、繡毬・秋海棠・石竹・紅蓮が瓶や觚に活けられ、花開いた菊や、まだつぼみの水仙、そして蘭が店頭に見られたという。

清末になっても、同様の状況は見られた。光緒丁亥（十三年、一八八七年）刊の『朝市叢載』巻五、服用の条には、  
新鮮な花は、宣武門外土地廟斜街の花廠にある。

とあり、宣武門外土地廟斜街に花屋が立地していたことを記している。

また船津諭助は、『燕京佳信』第八信（明治三十五年「光緒二十八年、一九〇二年」、十月十二日付）で同地の花屋（植木屋）について、

植木屋は花廠と申し東文学舎の西方に数軒有之候。

と述べている。この東文学舎とは船津が勤務していた学校だが、その所在地は順治門（宣武門）外の上斜街にあった。その西にある植木屋とは、まさしく『朝市叢載』が記す花廠である。船津はつづけて、

今は菊花（マダサカズ）、桂花のさかり時に候。先日調べしところによれば、当時備あるものは菊、桂、茉莉花、夜来香、架枝桃、芙蓉、石榴、菖蒲蓮（白キ花葉ハホソク、ランニ似タリ）、洋香球（コレハ西洋花）、シャボ天、ヲモト、西蕃蓮（天竺牡丹也多クハ黄）、柱桐花（子ナシ）、竜のひげ、小栢、小刺松等に候。

と、花屋の店頭に見られる花の品種についても、細かく観察している。

このような北京城内の花市・花屋は、北京南郊の草橋・豊

台における花卉栽培と、深い関係を持っていた。

(二)草橋・豊台の花卉栽培

草橋および豊台では、花卉栽培が盛んに行なわれ、人びとの花に対する需要に應えていた。草橋の花卉栽培については、『帝京景物略』卷之三に、

右安門の外、南十里の草橋は、十里四方で、みな泉である。……土と泉とは、もとより花に宜しく、人びとは花を育てることを生業としている。

と、明末の状況を記し、それは『宸垣識略』卷十三に、草橋は……多くの水の滯する所で、……土は泉に近く花に宜しい。人びとは花を育てることを生業としている。蓮の池があり、その香りは数里に達する。牡丹・芍薬は稲麻のように栽培されている。

とあるように、清代においても変わらなかった。

草橋に隣接する豊台でも、同様に花卉栽培が行なわれた。

『宸垣識略』卷十三に、

豊台は右安門外十八里にあり、人びとは花卉栽培を生業としている。草橋河が豊台に接している。(ここは)都のために花を養うところである。

とある。また、清の『藤陰雜記』卷十一に引く『人海記』にも、

豊台は宛平県の西、草橋の南にある。近郊花卉栽培の場所である。……都の花屋は、しきりにここで花木を培養し、四時絶えない。そして春時の芍薬は、最も天下にすぐれている。……水は清く土は肥えている。ゆえに植えた植物はよく茂り、春の芳草や秋の果実は、鮮やかで秀でていること画くがごとくである。

とあり、北京の花屋が豊台で花を栽培し、芍薬の栽培が著名であること、そこが「水清土肥」という水利と土壤に有利な環境に恵まれていたことがわかる。そして『欽定日下旧聞考』卷百四十九、物産に引く『六街花事』に、

豊台の花を植える人を、都中が花兒匠と見なしている。毎月三日・十三日・二十三日には、車に雑花を載せて槐樹斜街に至り、これ売る。

とあるように、豊台の業者は、毎月三日・十三日・二十三日の三日間、北京の槐樹斜街で花市を開いた。

北京の庶民たちに親しまれた豊台の花屋は、花を愛する宮廷とも深いつながりをもっていた。例えば『清稗類鈔』卷十三、朝貢類、豊台花匠貢盆菊の条に

光緒中、順天府(北京)の豊台の花屋が鉢植えの菊を進呈した。一枝に深紅の花があるもので、名づけて寿星袍といった。孝欽后(西太后)は、(その花を)大変惜しんだ。

とあり、花を愛した西太后と豊台の花屋との関係がうかがわ

れる。このようなつながりが一朝一夕に作られたとは考えられず、それはさまざまな花の栽培を長年行ない、品種改良に努めた結果であろう。

草橋や豊台の花卉栽培の様子は、『唐土名勝図会』巻四の挿絵中にも見られるが、図2の手前には蓮池があり、中ほどには柵で囲った花畑および鉢植えをかかえる人びとなどが描かれており、当時の情景を彷彿とさせる。

このような近郊花卉園芸は、多種類の花をその対象としたが、中でも豊台の芍薬は全国的にも著名であった。例えば『帝京歳時記勝』豊台芍薬の条には、

都の花木の盛んなること、これ豊台の芍薬が天下第一である。

とある。そしてつづいて、

古い伝えでは、劉放の芍薬譜には三十一品、孔武仲の芍薬譜には三十三品、王観の芍薬譜には三十九品の品種(が記されている)、また瑰麗の観という。今、揚州に残っている種はきわめて少ない。しかし都の豊台は四月の間に畦を連ね畛を接し、(花の) 荷に頼って商う者は日に万余茎(を数える)。遊覧に来る人は(お互いの) 輪轂を相望んでいる。惜しいことに、物好きな人がこれを描き、書き記すことがなかった。宮錦紅、醉仙顔、白玉帯、醉楊妃などの類のごときは、重樓牡丹といえどもまた比

べるのが難しい。

とあることから、同じ芍薬でも、実に多くの品種が栽培されていたことがわかる。それゆえ、当時のいわゆる商業書の一つ、『商賈便覧』にも、

「北京」順天府風俗勁勇沈静礼儀声名樸茂淳良土化之始  
塩 綿花・桃煤 芍薬 葡萄。

とあるごとく、北京の芍薬は、名高い特産物の一つとして記録されているのである。

このように、草橋と豊台を中心として北京の花卉栽培は行なわれていた。それに携わる園芸業者数については、『旧都文物略』十一、技芸略に次のように見える。

花卉栽培業者は崇文門内と東西四牌樓、および内城東の隆福寺、内城西の護国寺、宣武門外の下斜街、土地廟に数えられ、およそ三十家の記録がある。城外四郊と豊台十八村一帯に散在する者は、百家以上を数えられる。<sup>④</sup>とあることから、清末の頃、北京城内に三十家、城外近郊には百家以上あったことが知られる。

#### 四、おわりに

上述のように、明清時代の北京における花卉の文化について述べてきたが、それを享受するとともに育んできたのは、

一般庶民を中心とした広い範囲の人びとであった。もちろん皇帝や貴族は、広大な庭園で珍奇かつ多種類の花や木を所有し、自らの富と権力を誇った。しかし、それらを持ってない庶民たちも、市場や店先で鉢植えの花を買い求め、ささやかではあるが、花を愛し鑑賞する文化を広く深く育てていった。季節の移ろいに応じて、さまざまな花が街を彩り、それが歳時記にとり入れられていった。自分が鑑賞するだけでなく、人に楽しんでもらうための贈答用としても花は利用された。

さらに花は鑑賞用のみならず、実用品としても利用された。例えば女性のかんざし、かぎたばこの香料、薬品、染料などのいろいろな用途に、さまざまな花が用いられたのである。

また人びとは、花や木をその形・色・模様などにより非常に細かく分類し、沢山の品種をつくり出すという気質を持っていた。例えば芍薬にその典型を見ることができるのである。そしてその文化は、花や木を自然のまま鑑賞する場合もあったが、温熱栽培で冬に花を咲かせるという極めて人工的な一面をも有していた。

花卉の販売に直接携わった業者は、北京城内で花市を開いたり、常設店舗を設けたりして営業活動を行ない、その多くは郊外の草橋・豊台の花卉栽培業者と深いつながりを持っていた。彼らはこのような活動を通じて生活を成り立たせるとともに、花の文化をつくり育てていった。

このような様相は、人びとの花や木に対する関心を示すとともに、その文化を育て上げた中国社会の豊かさを示している。明清時代の北京を事例として、花と人との関わりについて考察したが、その文化は高い成熟度を持ち、一つの頂点に達していたといえよう。花卉の文化から見たとき、この時代は、花に対して旺盛な創造力が発揮された時期であったことが明らかになる。

注

- ① 塚本洋太郎『花の美術と歴史』（河出書房新社、一九七五年）。
- ② 中尾佐助『花と木の文化史』（岩波新書、一九八六年）。
- ③ 中尾氏同書、四〇～四四頁。
- ④ 合山究「明清時代における花の文化と習俗」（『中国文学論集』第十三号、一九八四年）。
- ⑤ 矢沢利彦訳『チナ帝国誌』（大航海時代叢書第Ⅱ期9『中国キリスト教布教史2』、岩波書店、一九八三年）、第1章、この国の概観、二七三頁。
- ⑥ 船津喜助編、小川博注『燕京佳信、船津輪助の北京通信、明治三十五年～三十六年』（船津喜助、一九七八年）、五六頁。
- ⑦ 中尾氏前掲書、三二～三三頁。
- ⑧ 船津氏編前掲書、三九頁。
- ⑨ 『赴燕日記』（民族文化推進会『燕行録選集』第九輯、ソウル、一九七七年）。

- ⑩ 同書同条。
- ⑪ 同書同条。
- ⑫ 同書同条。
- ⑬ 同書同条。
- ⑭ 同書同条。
- ⑮ 同書同条。
- ⑯ 『金熬退食筆記』、南花園の条には「凡江寧・蘇・松・杭州織造所進益景皆付澆灌培植」とあるが、織造が設置されたのは江寧・蘇州・杭州の三箇所であり、文中の松字は衍字と思われる。
- ⑰ 同書同条。
- ⑱ 矢沢利彦編訳『イエズス会士中国書簡集』5^ハ紀行編V(平凡社東洋文庫、一九七四年)、三四九頁。
- ⑲ 小野勝年訳『燕京歲時記』(平凡社東洋文庫、一九六七年)正月、東西廟の条、五〇頁。
- ⑳ 同書同条。
- ㉑ 同書、四月、玫瑰花・芍薬花の条、一〇一〜二頁。
- ㉒ 同書、六月、中頂の条、一三五頁。
- ㉓ 同書、九月、九花山子の条、一七七頁。
- ㉔ 船津氏編前掲書、一一八頁。
- ㉕ 小野氏訳前掲書、十二月、唐花の条、二三四頁。
- ㉖ 朴趾源『熱河日記』(民族文化推進会、ソウル、一九六六年)。
- ㉗ 『湛軒書』(民族文化推進会、ソウル、一九七四〜七五年)。
- ㉘ 同書同条。
- ㉙ 同書同条。
- ⑳ 朴氏前掲書。
- ㉑ 船津氏編前掲書、四三頁。
- ㉒ 同書同条。
- ㉓ 森田明『商賈便覧』について―清代の商品流通に関する覚書―(福岡大学研究所報十六、一九七二年)。
- ㉔ 『旧都文物略』(書目文献出版社、一九八六年)十一、技芸略、二六五頁。

(大阪府立狭山高等学校教諭)

此中國婦人賣花之圖也其人由花市買來沿街而賣以呼柘榴花剪樣挑賣佳戶婦人所用



图1 『北京民間風俗百圖』、書目文獻出版社、1983年



图2 『唐士名勝圖會』卷之四